

朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 18〉 junaida

◆ 小林 貴子 選

弁慶のやうな助っ人雲の峰 (奈良市) 上田 秋霜
夏の雲ドラゴンふうくに熱を吐く (ふじみ野市) 麻生結希子
八十年激残りたり敗戦日 (東京都杉並区) 菊池 和正
荻荷の子ちよくちよくうちに来たりけり (浦安市) 中崎 千枝
幼にも相性のあり水鉄砲 (久留米市) 桑原美知子
赤毛のアン函より出して曝書せり (京都市) 山本 京子
南吹く耳に優しき鳥言葉 (袋井市) 本多 りつ
嫌なこと忘れ金魚を目で愛す (厚木市) 北村 純一
松とは重きものなり草いさき (大津市) 小見 伸雄
中干しの窪の目高を救ひけり (小牧市) 楠木 揺葉

【評】一句目、そびえ立つ入道雲のような助っ人の登場とは頼もしい。二句目、雲の形はよくドラゴン風になるが、熱を吐かれてはたまらない。三句目、八十年を経た八月十五日の感慨。四句目、食材のお裾分けも、こんな表現にすると可愛い。

◆ 長谷川 權選

泳ぎつつ髪を洗ひし最上川 (寒河江市) 大谷 正行
沖繩は今も前線敗戦日 (東京都杉並区) 野口 嘉彦
やまもの口いつばいの過ぎし夏 (岸和田市) 宇野 京子
この夏を越えられたなら十周忌 (南房総市) 山根 徳一
竜巻と天に昇る気ありやしや (さぬき市) 鈴木 幸江
冷房の堂に一体国宝像 (葛城市) 山本 啓
合宿の西瓜三十二等分 (川越市) 小澤 弘一
逞しき腕の男もさす日傘 (東京都府中市) 保坂 俱孝
螢の姿の母を見送りぬ (岐阜県垂井町) 北嶋 克司
八月や戦争知らずとも反対 (葛城市) 山本 栄子

【評】一席。原初の夏。最上川流れる寒河江の人。二席。かつては日本とアメリカ、今はアメリカと中国。思惑が交差する最前線。三席。子どものころの思い出。口を真っ赤に染めて。十句目。想像力と意志。「知らずして賛成」の人もある。

◆ 大串 章選

老いてこそ湧き来る希望雲の峰 (青森市) 天童 光宏
向日葵のはじける笑顔水をやる (奈良県広陵町) 松井 矢管
朝顔のわがまま許す八十路かな (川崎市) 丸田 征男
わだかまり解けて風鈴鳴りにけり (高砂市) 小柳 献爾
片蔭の途切れ途切れの道なれど (姫路市) 梅津 房子
青春の汗と笑顔や人力車 (浜松市) 久野 茂樹
六巻の父の郷土史曝書せり (加古川市) 森木 史子
競走馬余生を送る大夏野 (石川県能登町) 瀧上 裕幸
無住寺の日々咲きとほす百日紅 (大阪府島本町) 芹澤 由美
遠雷を昭和の演歌のごとく聞く (さいたま市) 岡村 行雄

【評】第1句。「老いてこそ」が力強い。「雲の峰」が輝いている。ポジティブな人生観。第2句。「はじける笑顔」が楽しい。向日葵に毎日水をやる。第3句。朝顔には思いのまま這いまわり自由自在に咲き誇ってほしい。これが八十路の思いやり。

◆ 高山 れおな 選

この今はほんとに今か屋敷寛 (宇城市) 光永 金司
八月六日幾つになった俺だらう (神戸市) 豊原 清明
八十年かかつて届く南風 (仙台市) 高木 純一
キャンプの子眠りぬ星座表胸に (宝塚市) 三宅あきら
夕立のライトスタンドより来たる (静岡市) 松村 史基
どいてくださいこどもこしがとおります (戸田市) 峰巢 幸彦
我鬼の忌や蚯蚓這ひ出で干涸びて (我孫子市) 相川 健
沈黙は金と心得かたつむり (前橋市) 荻原 葉月
古里や誰も居ないが蟬は鳴く (長岡京市) 寺嶋 三郎
風来る護岸船虫集合中 (東京都大島町) 大村 森美

【評】光永さん。目覚めて、世界の「今」に愕然。豊原さん。過ぎ行く歳月に愕然、それが自分のそして世界の、智慧も成熟も意味しない事にさらに愕然。高木さん。これまた重く複雑な味わい。攝津幸彦に「南国に死して御恩のみなみかぜ」。

うたをよむ 戦渦の光

市村 栄理

間もなく戦後80年の終戦忌だが、世界では人間の愚行である戦争が絶えない。学兵汝音が仰ぎ目に息白き冬目見詰めて涙を支ふ下瞼
中村草田男、昭和19年の作。戦況が困難を極め、成蹊高校の教え子をついに戦場に送り出すことになった際の句だ。戦地に征く学生の涙をためる姿をありのままに表現。出征を運命として受け入れる生徒の辛さに寄り添い、見守る教師の情が伝わってくる。国家総動員法の下、自

由主義者と見なされ圧力を受ける中、ぎりぎり許された表現であった。勇氣こそ地の塩なれや梅真白
出陣近き教え子に示した同年の句。「地の塩」とは聖書マタイ伝に載る語。塩は防腐剤として人の世の腐敗墮落を防ぐものという比喩に託し、戦渦でも自暴自棄にならず、勇氣・氣力を持って生きよという意を暗黙裡に込めている。寒さの中で、春を告げる白梅の凜とした姿は、困難の中でも生きる光明である。樽

見博は著書『戦争俳句と俳人たち』で、統制の厳しい中、懸命に精神性の高い俳句を目指したと、草田男を評価する。街の灯の消えハルキウの星月夜
地下壕に紙飛行機や子らの春ウクライナの俳人ウラジスラバ・シモノバさんの句。病氣療養中に知った芭蕉に希望の光を感じ、句を詠み始めた。ロシアの侵攻後は、戦時下で生きる人々の心の憂を伝えようと作句を続ける。暗闇の街の満天の星、地下壕の子どもの姿には生きる強さと一縷の光がある。その言葉が誰かの生きる力、希望の光となることを願う俳人は詠み続けるのだ。(俳人)

◆ 8月17日の歌壇俳壇面は休載します。

第45回現代俳句評論賞 現代俳句協会主催。山形市の元木幸一さん(75)の「俳句になったデューラー —中村草田男作『騎士』の新解釈—」に決まった。北大路翼著「給食のぼさん」 小学校の給食従事者になった俳人による俳句日記。「一口の梨を千人分作る」(角川書店・1980年)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

